蜻蛉日記の中川転居……後藤祥子……一七一
——「人にものして」考——
〈いろごのみ〉の歌……鈴木日出男……一八九
——光源氏と朧月夜——
ことばに現れた環境……中川正美……二一三
——源氏物語の「浮く」「浮かぶ」——
『栄花物語』の環境……池田尚隆……二三九
資料篇
林下集標注 解題・翻字……高田信敬……二六七

研究篇

はしがき……秋山　虔……一

研究篇

平安文学の自然表現をめぐって……日向一雅……一
——『古今集』『枕草子』『源氏物語』の政教的文学観と「陰陽の燮理」を媒介として——

源氏物語と浄土の思想……中　哲裕……三五
——紫の上供養の極楽の曼荼羅をめぐって——

須磨の環境表象……松岡智之……六一

北山と大堰……平沢竜介……八九
——紫の上と明石の君の登場——

王朝文学にみられる「田舎」について……木村茂光……一二三

『源氏物語』の「田舎」と女君たち……武田早苗……一四五
——明石君・玉鬘・浮舟を取り巻く環境という視点から——

もしくはそれを美しいものにしてゆくところに、自然界に対する愛着の深さが現れている。(注2)

この他に平安貴族は自然を「人工化」して楽しむ（―庭園、州浜、和歌の詠法など）こと、自然は栄華の生活の道具、背景であるという指摘がある。この津田左右吉の言うところの、平安貴族の優美弱小な自然への愛好、生活の中での自然界の風物への愛着の深さと繊細な美の発見という点は、平安文学に描かれる自然と人間との関わりについての、最大公約数的な特色の指摘であると言ってよい。その特色は平安文学の代表的な三作品、『古今和歌集』『枕草子』『源氏物語』のすべてに共通する。

それが今日のわれわれの自然観の根底にあると言われる点もその通りであるが、本稿ではそうした平安文学の自然描写、自然表現にその時代の感性や感覚が捉えた美意識の創出を問題にするのではなく、その自然描写の根底に「陰陽の燮理」「天地人」の調和という儒教的政教的自然観が存したと考えられることを検討したい。言い換えれば、文学作品に好んで形象された自然はそのような観念を土台とした自然表現であったということである。とりわけ『古今和歌集』『枕草子』『源氏物語』の自然表現は政教的文学観と不可分な側面があったと考えられる。そのような自然表現の確立に画期をなしたのが、いうまでもなく『古今和歌集』であった。

一　『古今和歌集』序文の政教的文学観

『古今和歌集』が勅撰集であったことはそれじたい政治性を有したのであるが、その政治性とはどのような意味をもつものであったのか、はじめに見ておく。『古今集』編纂の目的は「仮名序」と「真名序」の二つの序文に述べられている。両序では若干の違いがあるが、「仮名序」によって要点を述べれば、次のようである。

和歌は人の心を本にして生まれ、神代から今日まで詠み継がれてきた。和歌の形式には六義があり、その歴史には盛衰があり、現代では世の中の風潮が虚飾を求め、人の心が華美になって、実意のない軽薄な歌ばかりになり、公的な場所で詠まれることがなくなったが、昔はそうではなかった。代々の帝は春の花の美しい朝や、秋の月の美しい夜などには、臣下を招いて和歌を詠ませ、賢愚のほどを見分けたものである。『万葉集』が作られてから百年以上が経ち、古代のことや和歌のことを理解できる人が少なくなったが、近代では僧正遍照や在原業平、小野小町など六歌仙が有名である。こうした和歌の歴史に鑑みて、古代のことを忘れず、和歌を復興しようという醍醐天皇の意図に基づいて、『古今集』は編纂されたというのである。

この序文の性格や意義については、目崎徳衛氏は10世紀初頭の朝廷の律令制強化策の一翼をにない、和歌を宮廷の公的な文学として位置づけようとする意図が存したと論じた。(注3) 小沢正夫氏は「仮名序」「真名序」の典拠、出典について詳細に検討し、「真名序」は『詩経』大序、『毛詩正義』序、『文選』序、『詩品』の影響下にあるが、語句の面では『詩経』大序に拠るところが一番多く、『正義』序の強調する政教主義的効用は薄められて移植され、『文選』序は文学展開の跡を整理する参考書になり、『詩品』は作家論の方法というような面での影響が考えられると述べる。その上で「真名序」と「仮名序」との異同と特性を論じた。(注4) 山口博氏は『古今集』の政治性について、「政治的風土」「律令の精神」「序文における標榜」「儒学の思想」等々の小節を設けて、律令制強化政策としての『古今集』編纂には儒教思想に則った政教主義、経学思想が謳われるが、序文から見て撰者は「儒学的文学論を以て編集に臨んだ事は疑いない」と論じた。(注5)『古今集』の政治性と政教的文学観については、これら先学の研究で論じ尽くされたと言ってよいが、本稿の文脈に即して私なりに再度確認をしておきたい。

まず『古今集』が勅撰集であることの政治性、政教性についてであるが、「仮名序」「真名序」のその部分を見てみよう。

かかるに、今すべらぎの天の下知ろし召すこと、四つの時、九のかへりになむなりぬる。あまねき御慈しみの波、八州のほかまで流れ、広き御恵みの陰、筑波山の麓よりも繁くおはしまして、よろづの政を聞こし召す暇、もろも